

第4回 双葉町復興まちづくり委員会 ふるさと再建部会 議事概要

■日時：平成25年1月17日（木） 午後3時00分～午後3時45分

■場所：双葉町役場埼玉支所 4階 4-B

■出席者：別紙座席表のとおり

■議事概要

1. 開会

2. 議事

(1) ふるさと再建に向けた取組の考え方について（審議）

資料 2、3、4 に基づき、事務局より説明後、質疑。委員の主な意見は、以下のとおり。

- 委員会の在り方については、委員の任期などはっきりと定めて、今後若い世代に引き継いでいけるような形をとってもらいたい。
- ふるさと再建に向けた取組に盛り込むべき内容（案）については、住民意向調査の結果を見ないことには、町民が何を望んでいるのか分からないので、どこの部分を変えるのかの判断は、今のところ難しい。
- 町内の学校再建は、一番重要なこと。子どもが集まらなければ、何年経っても町は復興できない。今の子どもが帰ってこなければ、その下の世代の子どもも帰ってこない。30年も経てば町は消えてしまう。およそ3年から5年先の見通しが必要である。
- 浪江町では二本松市に小学校を造ったが、入学希望者がいないという話を聞いている。幼稚園の同級生と同じ小学校に入れたい、希望者が少ないところには入れたくない、という親の事情もあるように思う。事務局で希望調査の状況を確認してほしい。
- 帰還に向けては、放射線量の低減が大きな課題である。放射線の不安があっては親や子どもが帰還できない。
- 川内村では、現在4割程度の住民しか帰っていないという話を聞く。高齢者が多く、若い人は帰りたくないと言っているのが現状のようである。
- 帰還するための第一条件は、原発からの放射能漏えいが止まること。その上で、将来性のある議論ができるかもしれない。アイデアがあって動こうという気持ちがある時は、諦めずに進んでいくことが大事である。
- 将来的な土地再建を考えるのであれば、町が地震や津波に耐えうる地盤がある場所を選定すべき。その場所に町民が集まるコミュニティを再建するという希望を持つことが大切である。
- 次に起こりうる津波や地震への対応として、地盤と海岸線からのある程度

の安全性が確保できる距離を考慮しなければならない。放射線だけではなく、次の津波の可能性にも言及して対策を講じなければならない。

- 線量が低くなれば帰れるというが、帰るためには道路などのインフラの復旧が必要である。
- 中間貯蔵施設によっては、復興計画の内容が大きく変わってしまう可能性がある。委員会として、中間貯蔵施設についての勉強会をしてはどうか。賛否はともかく、概要や構造などを知っておくことも必要ではないか。
- 中間貯蔵施設から半径 2 k m は人が住めないという話を聞くが、事実を知りたい。
- 中間貯蔵施設は、本当に中間なのか。原発立地町として、中間貯蔵施設は避けて通れない問題であり、議論や勉強会は必要である。

(2) その他

- 今回の部会のテーマである「ふるさと再建に向けた取組の考え方」については、住民意向調査などがまとまり次第整理することとし、本日の意見と追加意見をもとに、骨子案を検討することとする。

3. 閉会

第4回ふるさと再建部会座席表

(敬称略)

木
幡
敏
郎



1 日時 平成25年1月17日(木)

15:00~15:45

2 場所 双葉町埼玉支所 4階 4-B

木村 真三
伊澤 慶昭

(代理)
井戸川 陽一

竹原 天
西内 芳徳

(代理)
舶来 丈夫
渡辺 勇

平岩
事務局 相楽
森

事務局